

低学年次からのキャリア教育

2021年12月9日(木)

立石 慎治
Tateishi Shinji

筑波大学
教学マネジメント室 助教



事前課題動画 講義

低学年次からのキャリア教育

筑波大学の立石慎治(たていし しんじ)氏は、キャリア支援の新しい観点と求められる役割について、課題提起を行いました。キャリア支援といえば、かつては高学年次の就職支援のイメージがありました。しかし近年は、低学年次からのキャリア支援が広がってきています。文部科学省のデータを見ても、教育課程内の97%、教育課程外の95%においてキャリア教育が実施されている状況です。立石氏は「キャリア教育は決して授業だけではない、さまざまな教育活動を通して実践していく必要がある」と述べています。学生を生きた一人の人間として捉えていく際には、学問がすべてではないと考えるからです。ではどのような形で関わっていくのがよいのでしょうか。中央教育審議会答申の中では、キャリア教育で伸ばすべき人間関係形成・社会形成、自己理解・自己管理、課題対応、キャリアプランニングといった基礎的汎用的能力が紹介されています。そして、この能力を想定することが、キャリア教育の推進充実を図る上で、非常に重要だといわれています。

新しい『学習指導要領』が2020年度から施行され始めています。総則には、教科や科目の特質を生かし、身につけたい力は何かを具体化しながら、キャリア教育を充実させてくださいというメッセージが盛り込まれています。これを基に、初等中等教育では次のステップをどう選ぶかだけでなく、「いま学んでいることと将来がどう関わるのか」という意識付けがされ始めたことも、近年のトレンドといえるでしょう。

加えて「キャリア・パスポート」がスタートしました。振り返りの記録を蓄積するポートフォリオ的な教材を、小学校から高校までの12年間つなげようというものです。校種をつらぬき、場合によっては公私を超えて児童生徒の変容・成長を捉えていくことになります。人の成長に「年度」はありません。切れ目が無いからこそ、生徒を受け止める側の高等教育機関も、変容・成長を支えるための調整が必要になります。それは学士課程の見直しにとどまりません。小学校から高校、更には家庭生活、職業生活との関わりも含めて、接続を意識して教育課程を編成・実施するという観点が重要です。

人生の中でどれだけ働くことに重要性や意味を持たせるのかは、最終的には自分で決めること。社会人に対する調査でも、進路について「自己決定すべき」という意見が優勢である一方、できるだけ多くの人に話を聞いた方がよいという声もたくさんあります。時間をかけて、少しずつレディネスを高めていく、そして最後は自分自身で決める。こういうプロセスの中で支えていくという視点が大事なのではないかと、そう投げかけていました。

立石氏は、「キャリア教育を考えていくことは、大学人が高等教育そのものの在り方を考えること。3年経てば、高校で3年間振り返り活動をしてきた学生が入ってくる。歴史性を持った一人一人の存在たる学生たちにどのように関わられるか、議論していきたい」と締めくくりました。

OPENING

井上 示恩 Inoue Shimeon 日本学生支援機構 学生生活部長

ワークショップのはじめに、日本学生支援機構の井上学生生活部長より開会の挨拶がありました。課題動画への理解を深めた上で、グループワークでの意見交換により、学生に必要なキャリア教育について認識の共有を図り、各組織で活かしていただきたいと述べました。

登壇者による質疑応答

間間 理
Kikima Osamu

九州産業大学
商学部長/教授



オープニングトークの後、事前課題動画を制作した筑波大学教学マネジメント室助教 立石慎治氏が、参加者から事前に出された質問に答える形での質疑応答が行われました。ファシリテーターは、九州産業大学商学部長 間間 理(ききま おさむ)氏です。

間間 まずは多くの方から寄せられた「キャリア・パスポート」についていかがですか。

立石 「キャリア・パスポート」に関しては、新しい学習指導要領に全国一律で取り組むことが明記されており、すでにかなり進んでいる自治体もあります。文科省により様式が例示され、「地域や学校の実態に合わせてカスタマイズして使ってください」という建付けになっています。「今学期に何をするか」を書いて、学期の終わり頃に「どうだったか」を書かせるようなシートもあれば、高等学校総仕上げの年度に12年間を振り返るような様式も提案されています。次の段階にどう引き継ぐかなどは、各自治体で議論している真っ最中。どのように進めていくかについて、誰かが答えを持っているわけではないというのが正直なところ。

間間 「家庭との連携」という観点でみると、仕事について最もインタビューしやすい社会人は親御さんです。自分の強みや特性を探る場合にも、親から自分の良いところを聞くという形で課題を手伝ってもらうことができるでしょう。

立石 ちなみに地域に根差しやすい小中学校の場合、「保護者の協力を得ているかどうか」が学習意欲にプラスの影響を与える状況を作り出す要因の一つになっているという調査結果も出ています。

間間 一方で、親が内定をブロックするような話もあります。学生が自分で考え、自分の人生は自分で決める、そこを強くするのを手伝う観点で、大学等ではいろいろな仕掛けしていくことが大事だと思います。

立石 キャリア教育について「質的にどう充実させていくか」「不足している要素は何か」「どのように見なければよいのか」という問いについては、一つの方向性として3つのポリシーとどこまで関連付けていくかだと考えます。正課内の科目として位置付けるならば、他の科目との関連性、あるいは他の科目と社会をつなげるハブのようなポジションとなるかどうか。正課外なら、むしろポリシーに縛られず、柔軟に色々なことができると考えます。不足している要素を探る手がかりは、「我々の提供しているものは何と何を繋げるのか」と自問したときに見つかると思います。

間間 「低学年次の就職活動の具体例」としてどのようなものがあるかについては、学生自らが実践している事例を大学側がヒアリングし、その事例を共有していくという方法があるのではないかと思います。

立石 最後に「低学年次のどの段階からキャリア教育を行っていくか」ということですが、本日のグループワークで活発な意見交換をしていただきたいと思います。

キャリア支援・教育の拡大プロセス (見美川2020)

キャリア・パスポート：普段の記録を蓄積用に再編成

キャリア≒役割の積み重ね

グループワーク -Part1-

パネルディスカッションの後は、10グループ(1グループ5~6人)に分かれ、グループワークが行われました。最初のグループワークでは自己紹介、事前課題動画の感想、大学や企業で実践しているキャリア教育、グループの人に聞きたいことについて30分間の意見交換が行われました。

Topic

キャリア教育

コロナ禍で求人数が大きく変化した業界

求人が減っている中で学生に幅広い選択肢を与えるのに苦慮したという広告・デザインの大学関係者が、他大学にアイデアを聞いたところ、観光業界を扱う大学では、観光業はサービス業のため、コミュニケーションが好きという学生が多いので、観光業だけにこだわらず、いろんな業界に視野を広げるようにしているとの話がありました。「1・2年後には戻ると思うから、それまで違う業界でやってみないか」という言い方をするとときもあるそうです。デザイン・アートなど専門職を希望する学生が多い大学でも同じで、まずはその業界にとにかく入って、入った会社で力をつけていくことを伝えているそうです。これを受けて、ある企業からは、インターンシップの事例が紹介されました。その企業ではオンラインインターンシップを実施しており、社で扱っているフリーペーパーを学生に作ってもらっているそうです。アーカイブのURLを送って、過去の事例を事前学習してもらい、Zoomで応答をしながら新たなプログラムを作り出し、成果につなげて行くという方法とのこと。このようにあらかじめ学生に課題を与えるオンラインインターンシップなら、受け入れてくれる企業も多いのではないかとこの提案でした。

低学年次(1・2年生)に対するキャリア教育

大学担当者から、それぞれの大学での取組を話しました。「今まで3年生を中心に行っていたキャリア教育だが、1年生の早い段階からアプローチを始めている。」「本学では単位認定していることもあり、インターンシップは参加者が多い。」「基本は3年生が対象だが、中には1・2年生から参加できるものもあり、今年も2年生で参加している学生がいる。」という大学もありますが、「3年生向けのイベントに1・2年生も参加していいですよという形で間口を広げても、参加が少ない。」という状況はどの大学でも同じようにあり、大学担当者は頭を抱えているそうです。

低学年次のキャリア観

以前とは認識が変わってきているのではないかという話が出ました。意見を紹介します。

- ・今の低学年次の学生は、コロナで学外の人と関わる機会がすごく減ってしまったこともあり、キャリア観を育む機会がとでも減ってしまったように感じる。そこで、「キャリア=就活」というイメージをもつ学生が多く、「就活テクニックを教えてほしい」という層と「卒業後何をしたらいいかわかりません」「就活もしたくないです」という現実逃避している層に二分されたように感じている。低学年のときはもっと幅広い発想をもってほしい。
- ・もともと大学内の1~3年生の授業では、「キャリアに関することを考えてみよう」「インターンシップに行くための企業研究の仕方やマナー」「ESや志望動機を書いてみよう」というリアル就活の様な内容を扱っている。今までは、このような授業にほとんどを任せていた部分があったと思う。
- ・取組としては、来年から、4月の初年次ガイダンスで週に3・4回セミナーを開いて、キャリアガイダンスを入れようと思っている。就活よりの内容にならないように気をつけながら、「3年後には就活があるんだから今から考えていこうね」というメッセージを伝えていきたいと思う。

インターンシップで出会った学生たちの様子や考え方

ある企業は、いくつかの企業合同のインターンシップで、「働くって何?」というテーマを掲げて、学生が実際に職場に入り、社員の横についてどんな風に働いているか身をもって体験してもらうジョブシャドウイングというプログラムを実施したそうです。しかし、応募者が思いのほか少なかったそうで、学生は「働くとは何か」ということよりも特定の企業のインターンに行きたいのだと感じたといいます。企業がいろいろなプログラムを提案しても学生がついて来ないことから、学生が求めているものと企業が提供すべきと思っているもののギャップがかなりあることが問題なのではないかと感じたそうです。

今の学生が求めるもの

すぐに答えを探したが、知りたがる場所があり、自分の将来・人生など、自分で考えるもの・答えが出ないものとなると、逃げたがる・避けたがるのではと感じるという意見には、大学関係者のみなさんが同意していました。各大学で、状況は取り組みは異なりますが、このように、共通の課題も多いとの意見は複数のグループで出されました。

全体共有 -Part1-

全体共有では、大学や企業で実践しているキャリア教育の課題と現状について、グループワークを終えて、感じたことなどをチャットに書き込みました。ファシリテーターがその書き込みからいくつかピックアップする形で、全体への共有が行われました。

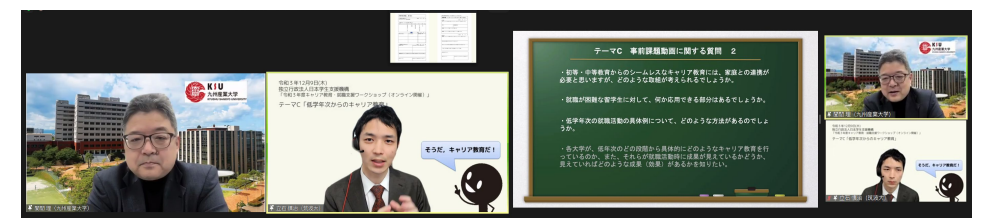
答えを問いつけること

あるグループで話し合った「学生がすぐに答えを求める傾向がある」という内容についてファシリテーターからは、「コロナ禍で大人も学生も先が見えないですが、問いつける、諦めないことが大切だ」というコメントがありました。

また、「キャリア教育と就活の違いを学生に認識させなきゃいけない」という意見について、キャリア教育とは、今考え、ずっと考えるものであって、就職してからも途切れることはないということを学生に理解させていくのが大事だとファシリテーターはコメントしました。

コンソーシアムでの連携

企業側からは、「各大学の悩みが共通していることから、個別の大学という視点ではなくコンソーシアムで対応するのが合理的と感じました。」という書き込みがありました。企業側から見ると、大学同士の連携が少ないことに驚いたといいます。大学同士そして企業と教育機関がもっと連携することで、もう少し幅広く学生支援ができるのではないかと感じたという意見でした。これを受けてファシリテーターは、そのような場をもっと設けること、自大学にてより多くの教職員がキャリア教育に関わるような実践を工夫することが今後の課題であると述べました。



グループワーク -Part2-

2回目のグループワークは、「①低学年次の学生たちに必要なことは何か」、「②低学年向けのキャリア教育のアイデア」、「③企業様との連携の可能性・アイデア」について意見交換をしました。グループワークの後には、一人一つの「アクション宣言(こんなことをやってみたい!)」をチャットに書き込みました。ベビーステップ(赤ちゃんの一步のように小さなこと)でも、ムーンショット(大きな取組)でも構いません。

Topic

低学年次の学生 / 自己理解の大切さ

コロナ禍を過ごしている低学年次の学生

オフラインになって登校した学生を見ると、「同級生がわからない」、「オンライン授業ばかりだったのでキャリアについて意識が弱いという現状があるのではないかと感じる」という意見から、「今の特殊な事情を抱えている低学年次には何か特別なサポートが必要なのではないか」という提案がありました。授業の中でグループワークなど議論をさせると、最初は全然喋れないが、時間が経つと喋れるようになってくる様子から、コミュニケーションに飢えていたのではと感じたそうです。今までは、対面授業でスーツを着ている学生を見て「そろそろ自分も就活を始めなきゃ」と意識し始める人が多かったのですが、オンラインだと「周りがやっているから...」という焦りが無いという実態もあるようです。

自己理解の大切さ

2・3年次で企業を選んでいく際、生い立ちを含めた自分への理解が大切になるといった話が企業の方から出ました。自分の棚卸ができていない状態で企業を探そうとする傾向が最近の学生は全体的にあるそうです。それを受けて、大学側からは学生が自分の理解を深めていくためには、いろいろなことを経験して、引き出しを増やす作業をもつ必要があると感じたという発言がありました。企業側から見ると、今の学生は将来の夢が漠然としているように感じるそうです。目標を見定めて、「こうなりたいからこの企業に入るんだ!」と考える学生はそれほど多くなく、自分がどうなりたいのか想像ができていない、自己理解ができていないように思えるといいます。大学側からは、「目標」について今まで大学の授業では取り扱う文化がなかったと新たな気づきがありました。目標を見つけることは学問ではなく生き方の話で、専門科目などで自分の知らない世界に触れる中で、学生は自然に目標を見つけていくものだという前提でカリキュラムが組まれていたように感じたそうです。これからは、そういった部分も大学側から工夫して提供しなければいけなくなってきたのかもしれないと語りました。

低学年次の学生への具体的な取組

企業からは、企業での就業の要素があるところでアルバイトをすると「こういう仕事があるんだ」、「大学で学んでいることがどうマッチングしていくのか」など、考え方が育成されるのではないかと提案がありました。

また、2年生の時に学生とキャリアの担当者で1対1の面談を行っているという大学では、「自分の将来を考えるのって楽しい」と思えるような、気軽に参加できる取組をしていきたいという発言がありました。今の学生は、自分の将来を考えた時の漠然とした不安、自分には何ができるんだろうという不安が大きいのではないかとその思いから逆転の発想が生まれたようです。具体的には、企業を回るバスツアー、低学年向けの企業説明会(ネーミングを工夫して堅苦しくないように)などを考えているそうです。

「発信力ゼミ」という初年次教育において、1年生が4年間の目標設定を行っている大学もありました。しかし、今考えると、あまり体系的でなく、連続性がないと感じたといいます。1年次の時に設定した目標に対して、こまめに振り返ることを積み重ねていくと、就活の自己PRにつながるのではないかと振り返っていました。

全体共有 -Part2-

2回目の全体共有では、企業と大学、双方の参加者から、ネクストアクションとして次のような内容の宣言がなされました。

企業から(抜粋)

- ✓ 業界研究(会社説明なし)を実施する大学を増やす!(今ならオンライン対応で地方でも実施しやすい)
- ✓ キャリアに対する関心のなさを学生のせいにするのではなく、学生のニーズを探り、ニーズに合ったコンテンツを提供し続ける!
- ✓ 産学官によるキャリア教育の連携に取り組みたいです。
- ✓ 大学以前からのキャリア観も含めた、長期的な個々人のキャリア観を評価して、受け入れと教育ができる体制を作りたいです。
- ✓ 産官学連携のもと、コロナ禍を経験してきた低学年次に対して、積極的に大学様のキャリア教育に企業として携わっていききたいと思います。

大学等から(抜粋)

- ✓ キャリア教育に理解を示してくださる企業様を開拓し、一緒に低学年次のインターンシッププログラムを作りたいと思います。
- ✓ 将来像を描けるように職業人や卒業生の話を聞けるイベントを企画していきたいです。
- ✓ 本学の学生の特性を見て広い視野を持てるよう、学生の支援を深く行っていきたいです。
- ✓ 4年間の体系的キャリア教育プログラムの構築にチャレンジしたいです。
- ✓ 低学年次向けの授業にて、企業との連携を強化していきたい。
- ✓ 学生の経験の言語化を低学年次から実践するようにする。定期的に振り返りを行う機会を作る。

「低学年次からのキャリア教育」ワークショップの終りに

ファシリテーターの仲間氏は、「キャリア」というすぐに答えが出ない問題に対して、学生も大学も短い時間で効率的に問題解決しようとしている印象を受けたが、もっとたつぷりと時間をかけて、協力して取り組んでいくことが大切であると述べました。

また、教養科目など、人生やキャリアの在り方について考えるような授業を担当している先生に「キャリア教育に携わっている」という認識を持ってもらうことは大きな意味があると語り、「『キャリアを考えることが楽しい』と感じられるようなイベントを考えたい」というチャットへの書き込みに対してとても

素晴らしいとコメントしました。

そして、低学年次のキャリア教育についての認識や問題が共有できたことを評価しながらも、こういう場がもっと増えて、教職員が企業側と関わる機会を持てたら、と次への課題意識を高めました。最後は、「学生が大学生のうちにやっておくべきことを考える機会を、私たちが仕掛けていきましょう」という趣旨の言葉で締めくくりました。